

Social Struggle in Catalonia: The Background and the Process of “La Canadiense” Strike (1919)

NIITSU Yoshitaro

Keywords: Spain, Barcelona, anarcho-syndicalism, general strike

Abstract

This article examines the social struggle in Catalonia that intensified in the aftermath of World War I, and complements Spanish history in the interwar period. In particular, it explores the background and the process of a strike that began at Barcelona’s most important electricity supplier, “La Canadiense,” and considers its historical significance.

After World War I, revolutionary movements escalated in various parts of Europe, and Spain, too, was no exception. Especially in Catalonia, labor movements gathered momentum and the anarcho-syndicalist labor union, Confederación Nacional del Trabajo (CNT), expanded its influence significantly. At the beginning of February 1919, the CNT instigated “La Canadiense” strike. Anarcho-syndicalist militants almost completely paralyzed the city, stopping utilities, mobilizing many workers, and deploying a firmly organized strike. Finally, the dispute ended with a remarkable victory for the workers.

“La Canadiense” strike was the last straw for Catalan industrialists. They were frightened by the strength of trade unions, equating it with “Bolshevism.” At the same time, Catalan employers concluded that the governing classes were unable to contain the revolutionary wave and maintain social order. For this reason, they formed an alliance with the Army and aimed the dissolution of the CNT. With this strike as a turning point, the social struggle in Catalonia became serious and undermined the Spanish liberal system. It had a huge impact on Primo de Rivera’s military coup (1923) that involved the demise of the Spanish liberal regime.

カタルーニャにおける社会闘争 —「ラ・カナディエンセ」のストライキ（1919 年） の背景と展開過程—

新 津 吉 太 郎

1. はじめに

本稿は、第一次世界大戦後、スペインのカタルーニャで社会闘争が激化するきっかけになった事件、すなわち電力会社「ラ・カナディエンセ¹⁾」のストライキ（1919 年）を考察し、両大戦間期のスペイン史研究を補完するものである。

第一次大戦後に生じた様々な問題とロシア革命の影響で、ヨーロッパ各地で革命的な動きが活発になっていった²⁾。スペインも、このようなヨーロッパの革命的な危機の例外ではなかった。スペインは第一次大戦に中立の立場を表明した。この中立という立場は、スペイン経済にかつてないほどの恩恵をもたらした。というのも、戦争によって交戦国の生産力が低下し、スペインが全交戦国にとっての供給者となり、戦前に交戦国が支配していた海外市場も獲得したからである。しかし、大戦中に起きたインフレーションや、大戦後に海外市場を失ったことで経済が悪化した。これが原

1) La Canadiense：カタルーニャの州都、バルセローナに約 7 割の電力を供給する電力会社の通称。この会社の詳細は後述する。なお、本稿では原語がカタルーニャ語である場合（例えば、この会社はカタルーニャ語で「ラ・カナデンカ La Canadenca」と表記される）も、混乱を避けるため、基本的には、カステイリャ語（スペイン語）で表記した。

因で労働運動が勢いづいた。

本稿が対象とするカタルーニャは、特に労働運動が活発で、アナルコサンディカリズムを標榜する労働組合のナショナル・センター、全国労働連合 Confederación Nacional del Trabajo（以下「CNT」と記す）が多くの労働者をその傘下に加え、勢力を拡大していた³⁾。

1919年2月、CNTは電力会社「ラ・カナディエンセ」のストライキを引き起こし、カタルーニャの州都、バルセローナを麻痺させた。CNTは非常に多くの労働者を動員し、組織化された運動を展開した。政府は戒厳令を布告し、多くのCNT活動家を逮捕、公益事業を軍隊の指揮下に置くなど様々な措置を講じたが、CNTを止めることはできなかった。この争議で労働側は、1日8時間労働など、大きな勝利を得た。

ラ・カナディエンセのストライキは、カタルーニャの資本家層の忍耐の

2) ドイツでは1919年1月、スパルタクス団が中心となり、約50万人を動員したゼネラル・ストライキに打って出て、社会民主党政権に大きな脅威を与えた。ハンガリー民主共和国では1919年3月、短命ではあったが、ハンガリー・ソビエト共和国が成立した（1919年8月、ルーマニア軍の侵攻で消滅）。オーストリア共和国では、1919年3月から社会民主労働党が革新的な社会政策を打ち出し、それは後に「赤いウィーン」と形容された。イタリアの1919～20年は、イタリア社会党が北イタリアの一連のストライキを指導し、労働者による工場占拠や農民による土地占拠など、革命的な運動が活発になった時期で、「赤い二年間」と呼ばれた。

3) 労働運動が活発だったのはスペインの南部、アンダルシア州の農村地帯も同様である。アンダルシアでは「ボリシェヴィキの三年間 Trienio Bolchevique」（1918～20年）と呼ばれる紛争が起きた。農民、特に土地を持たない日雇い農業労働者が土地の分配を求め、ストライキやサボタージュを繰り返した。大土地所有者は農業労働者の要求に恐怖を抱き、1919年9月、交渉に入った。しかし、CNTは大土地所有者からの妥協案を受け入れなかったため、事態の解決策を見出せず、次第に運動の勢いは衰えていった。なお、運動に参加した農業労働者たちは、ロシア革命の影響を受けて急進化していたため、この紛争には「ボリシェヴィキの」という名称がつけられた。

限界を超えさせた事件だった。彼らは、秩序と規律がある CNT の運動に大きな脅威を抱き、CNT の力をソ連の「ボリシェヴィキ」と同一視して、「スペインはロシアの次に崩れ落ちるドミノ⁴⁾」だと考えた。このような状況でカタルーニャの資本家層は、社会革命を防ぐことも社会の秩序を守ることもできない無能な政府への憤りを露わにした。社会革命への恐怖を払拭できなかったカタルーニャの資本家層は軍隊と同盟を結び、政府に頼ることなく、CNT の解体に向け動き出した。ラ・カナディエンセのストライキを契機に、カタルーニャでは社会闘争が激化した。それは次第に、スペインの自由主義体制全体に影響を及ぼす問題へと発展していった。バルセロナ軍管区司令官に就任したミゲル・プリモ・デ・リベラ Miguel Primo de Rivera (1870~1930) は、自由主義体制では、都市における社会暴動を粉砕することは不可能だと悟った。1923 年 9 月、プリモ・デ・リベラは軍事クーデターを起こし、スペインの自由主義体制を終焉させた。

ラ・カナディエンセのストライキはスペイン史において、過去に例が無いほど組織化され、統制された労働組合の力が存分に発揮された事件であり、カタルーニャの情勢を大きく変えた転換点だと捉えられている。そのため、戦間期のスペイン史を考察するうえで、ラ・カナディエンセのストライキは重要な事件の一つであると思われるが、このストライキを詳細に再構成し、考察する研究は皆無に近い。

しかし、ラ・カナディエンセのストライキを引き合いに出し、第一次大戦後、特にカタルーニャにおいて CNT が急成長したことに言及した研究は存在する。ペレ・ガブリエル Pere Gabriel やエンジェル・スミス Angel

4) Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith, "The Agony of Spanish Liberalism and the Origins of Dictatorship: A European Framework" in Romero Salvadó and Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism. From Revolution to Dictatorship 1913-23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, p. 16.

Smith は、教養が乏しく、階級意識が希薄だった当時の労働者を巧みな宣伝活動によって動員した、CNT 活動家のはたらきに焦点を当てている⁵⁾。また、クリス・イーラム Chris Ealham は、劣悪な環境におかれていた労働者の居住区で育まれた「互恵的な精神」が、直接行動において、多数の労働者の動員を可能にした重要な要素だったことを指摘した⁶⁾。

CNT 活動家に注目するにせよ、「一般の」労働者に注目するにせよ、第一次大戦後の CNT の急成長を説明するには、ストライキという具体的な事件において、両者がどのような行動をとっていたのか、明らかにする必要がありますと思われる。しかし、ラ・カナディエンセのストライキの背景と展開過程は詳細に再構成されていないのである。特に、CNT に動員された一般の労働者の実際の行動に関する言及はほとんど見当たらない。

先述の通り、ラ・カナディエンセのストライキは、カタルーニャの社会闘争を深刻化させ、スペインの自由主義体制の崩壊にも影響を与えた重要な事件である。よって、このストライキの背景と展開過程を詳細に再構成し、その歴史的な位置づけを改めてすることが重要だと思われる。

2. 王政復古体制（1875～1931 年）のスペイン

1875 年 1 月、アルフォンソ 12 世 Alfonso XII (1857～1885) の王政復古で、再びブルボン朝による立憲君主制がスペインに確立された⁷⁾。その翌年、「1876 年憲法」が制定された。この憲法はある程度民主的な諸権利や

5) Pere Gabriel, “Propagandistas confederales entre el sindicato y el anarquismo. La construcción barcelonesa de la CNT en Cataluña, Aragón, País Valenciano y Baleares”, *Ayer*, 42, 2002, pp. 105-145; Smith, *Anarchism, Revolution and Reaction: Catalan Labour and the Crisis of the Spanish State, 1898-1923*, New York: Berghahn Books, 2007.

6) Chris Ealham, *Class, Culture and Conflict in Barcelona (1898-1937)*, London: Routledge, 2005.

自由を導入し、議会と国王による共同統治を掲げていたが、実質的には王権が政治の裁決者だった⁸⁾。

1885年、アルフォンソ12世が死去すると、王政復古体制の政治を担っていた二大政党、すなわち保守党 Partido Conservador と自由党 Partido Liberal が協定を結び、「平和的な政権交代による二大政党制 turno pacífico」を確立させることで一致した。「二大政党制」は王政復古体制の根幹であり、体制を安定させる重要な柱となるはずだった。

この二大政党制を可能にしたのはカシキスモ caciquismo というシステムだった。カシキスモは、議会で圧倒的な多数派が形成されることを保証する欺瞞だった。選挙の際、内務大臣が県令に指示を出し、県令は各市町村長を指導して選挙が行政の望み通りの結果になるよう働きかけた。言い換えれば、選挙結果は行政によって選挙前にでっち上げられていたのであ

7) 1873年2月、スペイン第一共和政が成立した。しかし実際には、議会の多数派は王政を支持しており、共和国宣言はブルボン朝復活のための時間稼ぎだった。そのため、第一共和政は安定した政治を行うことができなかった。1874年12月29日、マルティネス・カンボス將軍のクーデター宣言で第一共和政は崩壊した。このクーデター宣言は、アルフォンソ12世のもとでの王政復古を意味した。翌1875年1月、アルフォンソ12世がスペインに帰国し、王政復古が完了した。

8) 例えば、言論・集会・結社の権利や、個人の内面的な選択権としての信教の自由などが認められた。しかし、カトリックを国家宗教として明確に定め、他の宗教には公的な宗教活動を許さなかった。国王は行政・立法・司法に介入することが可能で、陸・海軍の最高司令官であり、議会の招集や解散、閣僚の任命や罷免の権限を持っていた。ただし、ここで一つ付け加えておきたい点は、スペインの王政復古体制の政治に関しては、特に日本において、否定的なイメージがあまりにもステレオタイプ化していた、ということである。例えば以下の研究は、スペインの立憲君主制は、当時としては驚くほど「民主的な」諸制度が整備されていたことを指摘し、従来の否定的な見方に批判を加えている。野上和裕「スペイン立憲君主制の崩壊—カタルーニャの社会変動を中心として（1）」『国家学会雑誌』100号、1987年、569～629頁。

る。この偽装は、カシーケ⁹⁾と呼ばれるその土地の有力者の助けで成り立っていた。カシーケはその土地の業務を統制し、行政上の恩恵を受け取れるのであれば喜んで選挙操作に協力した。人々の投票の結果は、政権交代を決定づけるものではなかったのだ¹⁰⁾。

カシキスモによって、王政復古体制は安定した政治を行っていた。しかし、体制を大きく揺るがす事件が起きた。1898年、スペインはキューバの利権をアメリカ合衆国と争った米西キューバ戦争で敗北し、海外植民地を全て失った。スペインのエリートは国の徹底的な自己省察をし始めた。多くの知識人は、寡頭支配の王政復古体制はスペインの後進性と衰退の原因だと考え、責任を追及した。この米西キューバ戦争の敗北で再生主義¹¹⁾が台頭したことを皮切りに、王政復古体制は様々な方面から激しい批判を受けることになった。

9) cacique: それぞれの土地の環境に密着し、国家行政の財源で生計を立てていた中産・上流階級、すなわち土地所有者、自由業の職業人、実業家など、その土地の経済の原動力とつながりのある者たちだった。

10) 二大政党は、カシキスモの効果的な作動を保证するため、結束を維持しなければならなかった。というのも二大政党の政治家は、個人的な恩顧主義の集団で成り立っていたからである。この集団は、それぞれの土地の名望家やカシーケによって形成された。これは恩顧主義の政治文化であり、ボスとクライアントの関係に基づくものだった。また二大政党は、カシキスモに基づく政治システムが「人為的」とであるという批判を論破するため、地方レベルでも様々な関係を構築していた。とはいえカシキスモは、大衆政治とは相いれない「名望家政治」だった。Javier Moreno Luzón, "The Government, Parties and the King, 1913-23" in Romero Salvadó and Smith (eds.), *op. cit.*, pp. 36-37.

11) Regeneracionismo: 米西キューバ戦争の敗北を受け、主にスペインの知識人に広がった思想・運動。危機を迎えたスペインの栄光を奪回すべく、将来的な展望をもつ国家へ生まれ変わる必要性を訴えかけた。しかし、知識人たちの考えが多様であったため、首尾一貫した思想・運動にはならなかった。

また、米西キューバ戦争での敗北でもう一つ大きな変化が見られた。二大政党のカシキスモを打破した政党が現れたのだ。特に成果を上げたのはカタルーニャで、地域主義連盟¹²⁾（以下「リーガ」と記す）と、アレハンドロ・レルー¹³⁾（1864～1949）を支持する共和主義者が、多くの有権者の支持を獲得した。

米西キューバ戦争後、二大政党は指導者の刷新を行った。この指導者の刷新がきっかけで、保守党と自由党の政策が対立し、「平和的な政権交代」が困難になっていった。さらに第一次大戦期に入ると、カシキスモの維持・根絶をめぐり、各党内での内部対立が顕在化したことも相まって、議会では多数派が形成されず党派が分立したため、立法権が機能停止する事態も見られた。

1918～23年、スペインでは合計10回もの政権交代が行われたが、いずれも一年に満たなかった。カシキスモに基づいた不正選挙に頼ったにもかかわらず、保守党も自由党も、政権を掌握できるほどの多数派を形成することはできなかった。そのため両党は、憲法が保障する諸権利を停止し、議会を閉会する例外的な方策に訴えた。

議会が党派分裂し、機能停止に陥っていたため、体制にとって必要な政策を進めることは困難だった。このような政治危機を背景に王政復古体制は、反体制派からの攻撃に有効な抵抗ができず、その鎮圧を軍隊に頼るよ

12) Liga Regionalista: 通称「リーガ」、1901年創立。この政党の起源は、1880年代、ロマン主義の流れのなかで、カタルーニャ独自の言語・文化的伝統の復興を目指した文化運動によって、地域ナショナリズムの動きが活発になったことに見出される。リーガは、動的なカタルーニャは後進的なスペイン国家に抑圧されていると考えており、カタルーニャの資本家層と同じ意見を持っていた。リーガはカタルーニャの資本家層の利益を代表する政党となり、両者は密接な関係を築いていった。

13) Alejandro Lerroux: 反教権主義を掲げ、政治闘争において暴力行為を率先して容認し、民衆を扇動した。レルーはそのデマゴギーで、カタルーニャの一部の労働者の支持を獲得していた。

うになっていった。このような状況で軍隊は、軍隊による統治こそスペインを救済する有効な解決策であると考えようになり、政治の舞台への介入を徐々に強めていった¹⁴⁾。

王政復古体制の二大政党に反対する勢力は、基本的には共和主義者と社会主義者だった。しかし、両者は体制の代替案を打ち出すことも、選挙合意で強力な地盤を築くこともできなかった。

共和主義勢力のなかで最も頭角を現していたレルーの急進党 Partido Republicano Radical も、1910 年代に入ると人々の支持を失い、その思想と演説を軟化させ、徐々に保守的な姿勢に転じていった。また、その他の共和主義勢力は分裂を深めていき、傑出した指導者を擁立できなかったの
で、体制の脅威にはなり得なかった。

社会労働党 Partido Socialista Obrero Español（スペインの社会主義政党）は、労働者総同盟¹⁵⁾（以下、「UGT」と記す）を通じて地盤を築いていたが、議会では弱小勢力だった。社会労働党は「1917 年の危機¹⁶⁾」での失敗から、直接行動を重視する路線を変更し、議会主義と穏健的な改革主義を実施する立場をとるようになった。しかし第一次大戦後、党内ではロシア革命をめぐる議論が活発になった。ポリシェヴィキへの支持をめ

14) 王政復古体制の根幹となった 1876 年憲法は、軍隊を国外の敵だけでなく、国内の敵に対する保証人だと規定していた。19 世紀の終わりから、労働者の抗議運動と地域主義運動が活発になり、スペイン国内の治安が幾度も脅かされた。ここで警察力の弱さを露呈した王政復古体制は、ますます軍隊に治安維持の役目を負うことになった。Sebastian Balfour, “The Making of an Interventionist Army, 1898–1923” in Romero Salvadó and Smith (eds.), *op. cit.*, pp. 256–257.

15) Unión General de Trabajadores: 労働者による政治権力の奪取を目指し、1879 年に創設された社会労働党と密接な関係をもつ労働組合として 1888 年に創設された。労働者総同盟（UGT）はバルセロナでは勢力を広げることはできず、主にマドリードと、鉱山工業地帯であるスペイン北部のアストゥリアスやビスカヤに地盤を築いた。

ぐって党内に対立が生じた。しかし、ポリシェヴィキ支持派は党内でほとんど支持を得ることができなかったので、1921年、社会労働党から離反してスペイン共産党 Partido Comunista de España を創立した。共産党はバスク地方の鉱山地帯で地盤を築いたが、全国的に見れば極小勢力だった。社会労働党も共産党も、第一次大戦後のスペインにおける革命的な動きの中心にはならなかった。スペインでその役割を担ったのは CNT だった。

王政復古期のスペインとカタルーニャの状況を説明する際、先述の「リーガ」について述べる必要がある。リーガは、カタルーニャがヘゲモニーを握ることが可能なスペイン国家を形成するため、カタルーニャ主義 Catalanismo を主張した¹⁷⁾。リーガはそれを実現するため、カシキスモによる二大政党制を克服し、寡頭支配に取って代わる政治システムを要求した。

16) Crisis del año 1917: 1917年、王政復古体制は軍防衛評議会 Juntas Militares de Defensa (アフリカに従軍する将校たちに対して、スペイン本国に従軍する将校たちが自分たちの処遇の改善を求めて設立した組織)、カタルーニャ議員会議 Asamblea de Parlamentarios Catalanes (反王政復古体制派が結集し、憲法改正を求めて立ち上がった運動)、UGT と CNT が合同で行ったゼネラル・ストライキという、三方向からの攻撃を受けた。当初は三つの運動が協同するかたちをとったが、それぞれ独自の目標があったため持続的な合意に至らず、体制を転覆させることはできなかった。

17) リーガは後述する通り、スペインからの完全な分離・独立を望んでいたわけではない。リーガはスペインのなかに自らを位置づけ、国を近代化させることで、カタルーニャを発展させようとしていた。よって本稿では、このようなリーガの姿勢を考慮し、リーガが主張したものを「カタルーニャ・ナショナリズム」ではなく「カタルーニャ主義」と定義する。また、リーガの創立時、カタルーニャのあらゆる支配層がリーガに賛同したわけではなかった。20世紀初頭、多くの土地所有貴族や資本家層は、王政復古体制の二大政党を支持していた。しかし、米西キューバ戦争の敗北以降、スペインの中央政府はカタルーニャを抑圧する重荷だという感情が、彼らのなかで高まっていたため、リーガはカタルーニャの支配層の支持を獲得することができた。

リーガの姿勢は矛盾していた。リーガはカタルーニャ主義を主張しつつも、王政復古体制との交渉を通して譲歩を引き出す、「上からの革命」を望んでいた。またリーガは、スペインのなかに自らを位置づけ、スペイン国家を近代化させることで、カタルーニャ資本主義の発展に寄与しようとしていたのだ¹⁸⁾。

1918年の終わり、ウィルソン米大統領の「14カ条」と連合国の勝利で、カタルーニャ主義運動に弾みがついた。リーガの党首フランシスコ・カンボ Francisco Cambó (1876~1947) はこれに乗じて、政府に法令でカタルーニャの自治権¹⁹⁾を認めさせようと動いた。しかし、カタルーニャ主義者が期待した結果は得られなかった。

その結果を受け、カタルーニャ主義の急進的な若者たちが自治権を要求する声を上げ、デモを展開した。この動きが保守的なスペイン・ナショナリズム運動を刺激した。1918年の終わりから、バルセローナではスペイン愛国連盟²⁰⁾やカルリスモ²¹⁾を信条とする者と、カタルーニャ主義者が街頭で激しい衝突を繰り返すようになり、戒厳令が布かれた。しかし、カタルーニャの自治権をめぐる議論も衝突も、カタルーニャの CNT の急成長で引き起こされたラ・カナディエンセのストライキを契機に、脇に追いやられてしまうことになる。

18) Smith, "The Lliga Regionalista, the Catalan Right and the Making of the Primo de Rivera Dictatorship, 1916-23" in Romero Salvadó and Smith (eds.), *op. cit.*, pp. 145-149.

19) 国家主権に関わるもの以外について、カタルーニャの完全な主権を要求するものだった。

20) Lliga Patriótica Española: 1918年11月にバルセローナで創立、1919年春までに約4,000人のメンバーを抱えた。保守主義者、共和主義者、(後述する)カルリスタ、軍隊の将校など、広範な階層をその構成員とした。扇動的なレトリックで支持者を獲得し、カタルーニャ主義者への攻撃に特化した。彼らにとって、右翼か左翼かは、カタルーニャ主義者かスペイン主義者かより重要ではなかった。

3. カタルーニャ資本主義の形成

スペインは20世紀になっても圧倒的な農業国だった。19世紀初頭に新興ブルジョワジーが台頭するが、それはカタルーニャなどの沿岸部に限られていた。内陸部では依然として貴族、大地主、聖職者を中心とした封建的な勢力が巨大な経済力を握っていた。スペイン全国土の約3分の2が、上記の階層に半永久的に所有されており、生産性のある投資はほとんど行われなかった²¹⁾。

19世紀をかけて行われた農地改革は、土地の所有形態を抜本的に変えることができず、単なる支配層の代替をしたにとどまってしまった。よっ

21) Carlismo: 1833年、フェルナンド7世が没し、3歳になったばかりの娘がイサベル2世として即位した。しかし、フェルナンドの弟カルロスは、イサベルの王位継承を否認して自らの即位宣言を行い、カルロス支持派（カルリスタ Carlista）の蜂起が各地で起きた（その後、鎮圧された）。穏健派自由主義の路線を貫こうとしていた王家に対し、カルロスは明確に伝統主義・保守主義の立場を示した。カルリスタは大規模な反乱を3回起こしたが、全て鎮圧された。カルリスモはカトリック教会の利益は国益より優先されるべきだと考え、信仰と政治の同一化を図る、政治宗教を信奉するものだった。ローマ教皇への絶対的な忠誠を誓い、社会の世俗化の進行とともに、人々がカトリックの伝統的規範から逸脱していくことを批判した。バスク地方やカタルーニャの農村社会では、民衆や下級聖職者の多くがカルリスタだった。

22) 石井陽一・戸門一衛『スペイン—その国土と市場』科学新聞社出版局、1990年、126～127頁。また、18世紀を通じて、農業生産力は緩慢ながらも向上してきたが、余剰は贅沢品の購入などに向けられてしまった。そのため、生産拡大と労働需要を引き出す投資は十分には行われなかった。さらに、新興ブルジョワジーが生まれてもすぐに貴族化してしまう場合が多かったので、生産拡大による富の蓄積を目指すとともに、それによって社会の価値観を変えていこうとする原動力が、他の西欧先進諸国とは異なりスペインには形成されなかった。

て、農業生産力を高めて人々の購買力を増大させ、工業の発展を中心とした資本主義経済の形成が、スペインでは大幅に遅れてしまった。この点が、スペインと他の西欧先進諸国との間に大きな格差を生じさせた原因になった。このような状況で、19世紀を通してスペインで工業が発展し続けたのは、カタルーニャとバスク地方だった²³⁾。

19世紀、スペインにおける近代工業の成長は、カタルーニャの綿織物業から始まった。カタルーニャでは18世紀中頃すでに、綿織物を生産するため大規模な工場制手工業が存在していた。19世紀にさしかかる頃、イギリスで生まれた新型の紡績機械が導入されていった。1830年代には蒸気機関が導入され、機械化が進んでいった。1861年には紡績機械が手作業に完全に取って代わった。

19世紀中頃、カタルーニャの綿工業がスペインの繊維工業において優位に立っており、繊維部門の全体の約6割以上を占めていた。カタルーニャの近代的な綿織物製品は、その品質の良さと価格の安さで、スペインの至る所にあった伝統的な繊維業に取って代わった²⁴⁾。とはいえ繊維工業は、確かにカタルーニャの工業化に寄与したが、経済を牽引し、スペイン全体の工業化を推進するには、まだ不十分なものであった²⁵⁾。

23) 本論では触れないが、バスク地方は古くから良質な鉄鉱石の産出地として知られていた。1870年代には、イギリスの鉄鋼生産の増加に対応する形で、バスクの鉄鉱石の輸出需要が拡大し、鉄鉱石採掘企業が外国資本とバスク資本により次々と設立されていった。対イギリス輸出が増加していくと、鉄鉱石の船積みのために寄港するイギリスの船舶が、コークスを輸送してくるようになったため、バスクでは鉄鉱石輸出による資本蓄積を基礎として、近代的な鉄鋼業の育成と発展が促進されるようになった。伝統的農業構造が依然として支配的だったスペインに鉄鋼ブームを発生させることはできなかったが、軽工業中心のカタルーニャに比べ、バスクでは重工業が当初から形成された結果、所要資金は後者の方が大きくなった。その影響もあり、20世紀に入ってスペインの金融資本を支配することになるのはバスク資本だった。同書、129～130頁。

王政復古期、カタルーニャの繊維産業は活況を呈していたが、農村社会の限られた購買力が原因で、その成長率が徐々に低下していった。そのようななか、政府は自由貿易政策を打ち出した²⁶⁾。保護貿易を求めているカタルーニャの資本家層はこれに反発した。彼らは1885年、カタルーニャの利益を守るため、この地域の主要な経営者諸団体を連合させ、「全国労働勸業会 Fomento del Trabajo Nacional」（以下「FTN」と記す）を結成した。

24) 成長を遂げたカタルーニャの繊維工業は、19世紀半ばまでに、ベルギーとイタリアを追い越し、イギリス、フランス、合衆国に次ぐ世界第4位の地位を獲得した。しかしその一方で、カタルーニャの産業エリートは、カタルーニャの産業構造には多様性が無い、という欠点にも気がついていた。例えば、20世紀の最初の10年間でさえ、綿工業に投資された資本は羊毛業の4倍、冶金部門の6倍にものぼっていた。Joseph Harrison, *An Economic History of Modern Spain*, Manchester: Manchester University Press, 1978. [ジョセフ・ハリソン（弘田嘉男訳）『スペイン経済の歴史—18世紀から現代まで』西田書店、1985年、91頁。]

25) その理由として、スペイン史では以下の理由が挙げられている。第一に、スペインの大多数の消費者の購買力が貧弱だったため、需要が欠如し、高いコストが強いられたことである。このことが原因で、競争力を向上させる刺激は生まれなかったのだ。第二に、スペインは水力エネルギーを得るための河川を欠き、石炭の質も悪かったため、エネルギー源が不足していたのである。第三に、スペインはヨーロッパの中心から外れた位置にあったことである。輸送費がかさむ時代だったため、工業化の中心地から離れていたことは、工業の成長にとって不利だった。J. Aróstegui Sánchez y otros, *Crisol. Historia. Bachillerato. Segundo Curso*, Barcelona: Editorial Vicens-Vives, 2008. [J・アロステギ・サンチェスはか（立石博高監訳）『スペインの歴史—スペイン高校歴史教科書』明石書店、2014年、188頁。]

26) 例えば、1882年にフランスとの間に結ばれた通商条約である。これはフランスの工業製品の流入を容易にすることと引き換えに、スペイン南部のぶどう酒輸出を増加させようという、大土地所有者の意図を汲むものだった。

カタルーニャの繊維産業家たちは、成長率の低下を阻止するため、植民地市場（キューバ、プエルトリコ、フィリピン）に目をつけた。彼らは政府に働きかけ、スペイン以外の地域から、植民地への輸入に対する関税障壁を大幅に引き上げることに成功した。1891～98年の間、植民地へのスペイン産物の輸出は、それまでの倍以上になった。とはいえ、カタルーニャの繊維産業の経済規模は、ヨーロッパの標準から見れば小規模で、主要工場の設備面でも、国際的にほとんど取るに足らない存在だった²⁷⁾。

王政復古期のカタルーニャで、綿業以外で発展した産業は、羊毛業、コルク産業、そして冶金業だった²⁸⁾。また、電気と石油の使用が普及し、エネルギー不足という、19世紀のスペインの成長を妨げていた原因の一つが解消された。電力の商業利用と変圧器の発明によって、工業活動全体の機械化と生産コストの削減が可能になった。さらに、製品の価格低下によって需要が引き出され、生産の増大も可能になったのである²⁹⁾。

先述の通り、特に1890年代から植民地は、カタルーニャ工業にとって重要な市場となった。というのも、カタルーニャの資本家層は植民地市場を、国内市場の不足を補うために不可欠な代替市場だと考えていたから

27) ヨーロッパの主要な工業都市と比較した際の、カタルーニャ工業の後進性は、株式会社がほとんど存在しなかったことと、借入金への依存が限られていたことによるものだった。例えば20世紀初頭、バルセロナ株式取引所の上場株式会社数は、スペイン全体の上場総数1,000社に対して、わずか15社しか存在しなかった。また、外国の諸銀行の支店やスペインの主要な銀行が、カタルーニャに若干数の店舗を構えていたが、これらの銀行が工業の発展に果たした役割はほとんどなかったのである。ハリソン前掲書、101頁。また、カタルーニャ工業の後進性については、以下の研究も参照。Michael Seidman, *Workers against Work: Labor in Paris and Barcelona during the Popular Fronts*, Berkeley: University of California Press, 1991. [マイケル・サイドマン（向井喜典・岩村等ほか訳）『労働に反抗する労働者—人民戦線期のパリとバルセロナにおける労働』大阪経済法科大学出版部、1998年、20～37頁。]

だった。しかし 1898 年、米西キューバ戦争での敗北で状況は一変した。この敗北によってカタルーニャ工業は、利益が見込める海外市場を失ってしまった。そのため、カタルーニャ工業の輸出に有利な場所を見つけられない無能で、近代的な資本主義経済を損ねて生産性のない大土地所有者を甘やかす王政復古体制から分離しようとする動きが、カタルーニャの資本家層の間で見られるようになった。

この気持ちを汲みとったのがリーガだった。リーガは 20 世紀に入ると、カシキスモによる寡頭支配を破壊するため、カタルーニャの中産・上流階級の支持を獲得し、カタルーニャ工業の必要条件となった、自治権の獲得計画を前面に出した。

しかしリーガは、カタルーニャの資本家層の意向によって、その方針を

28) 羊毛業は、主に国内市場でその地位を獲得した。しかし、カタルーニャの羊毛業に従事する労働者数は、綿工業に従事する者の約 3 分の 1 に過ぎなかった。コルク産業の成長は、ヨーロッパ諸国のぶどう酒商や醸造業者からのコルク栓の需要が増大したことに応えるものだった。コルク栓の輸出は 14 億 1600 万個 (1889 年) から 33 億個 (1900 年) に増加した。この時期のカタルーニャのコルク産業は、圧倒的に職人の産業で、800 を超える、散在した小さな作業場で生産が行われており、20 世紀初頭になるまで機械化の普及はなかった。冶金業は 1880 年代から設備が整えられ、近代的な会社・工場が設立されていった。しかし、カタルーニャにはまだ溶鋳炉が存在しなかったので、バスク地方などに比べると後進的だった。ハリソン前掲書、101～103 頁。

29) 1880 年代～1914 年までのスペインにおける電力の使用は、照明（特に大都市の街灯、工場、公共の場など）に限られていたが、1914 年以降、電力使用は工業活動にも拡大された。アロステギ・サンチェスほか前掲書、196 頁。カタルーニャでは、1880 年代からいくつかの電力会社が作られた。カタルーニャはそれまで、外国資本が浸透するのを拒んでいたが、この分野はコストがかかり専門的な技術が必要になるため、外国からの管理技術が導入されることになった。1880 年代終わり頃まで、電力はバルセローナの街灯や、一部の先進的な劇場やカフェのイルミネーションに使われていた。その後、バルセローナ市電にも使われるようになった。ハリソン前掲書、103 頁。

変えなければならなかった。それは、カタルーニャ工業が国際市場で競争力がなかったため、国内市場に依存しなければならなかったことと関係している。カタルーニャの資本家層は、カタルーニャの利益がスペイン南部・中央部の大土地所有者と体制の政治家に蝕まれてきたことは認めながらも、カタルーニャ資本主義の未来は、スペインの内部にあると考えていたのだ。

植民地喪失後、マドリードの中央政府はカタルーニャの資本家層が提起した諸計画を拒否した³⁰⁾。この経済の近代化を図る諸計画が失敗すると、カタルーニャの資本家層はこれまで通り王政復古体制を支持する態度をとり、関税保護の強化を引き出そうとした。

一方リーガは1914年、「カタルーニャ四県連合体 Mancomunidad de Cataluña」(以下「四県連合体」と記す)の設置を成功させた。四県連合体は1833年の県区分により四県に分けられたカタルーニャを、一つの行政体にまとめたものである³¹⁾。四県連合体の設置によってカタルーニャは公共事業と文化事業に関して、一定の自治権を獲得した。これによってカタルーニャの資本家は、公共事業を軸にした諸計画によって、カタルーニャ市場の拡大に向けた動きを実行に移すことが可能になった。

第一次大戦の勃発は、スペイン経済に大きな恩恵をもたらした。輸出総額の増加に寄与したのは工業製品だった。この戦争ブームは、戦後の不況により短命に終わるが、スペインにおける資本主義社会の基礎を形成するきっかけとなった³²⁾。

カタルーニャには、代理業者や投機家が殺到した。この新たな需要に刺

30) 例えば、巨大な近代的港湾コンビナートの建設を含んだバルセロナ自由港の法案は、政府の調査が行われたにもかかわらず、中央部の大土地所有者や農民の反対(密輸の温床になるだろう、という批判)にあって廃案となった。

31) 四県とはすなわち、バルセロナ県、ヘローナ県、タラゴナ県、レリダ県である。

激され、カタルーニャの資本家層は多数の労働者を雇い入れた³³⁾。工場は昼夜を問わず稼働し、新たな設備が整えられた。先例のないほどの利益と、多くの成金を生んだ。

この新情勢で、様々な業種が恩恵を受けた。例えばこの時期、バイヤーの買い入れの筆頭格は、毛布と毛織の軍服用だったため、羊毛工業の成長は著しかった³⁴⁾。また、代替資材に対する繊維工業からの需要に応え、それまでドイツから輸入していた染料を筆頭に、化学・薬品工業も発展を遂げた。さらにこの輸入代替は、台頭しつつあったカタルーニャの冶金、機械工業にも良い影響を与えた。

しかし第一次大戦後、スペインは社会と経済の領域で危機に陥った。カ

32) 1901~14年、スペインの輸入超過は10億3100ペセタにのぼっていた。しかし、1915~19年の5年間で21億3100ペセタの貿易黒字を蓄積した。工業製品の輸出総額は、例えば基準年次の1913年を100とすると、1915年には241へと増大した。さらに、工業に従事する労働人口の割合は、15.8% (1910年) から21.9% (1920年) に上昇した。その一方、農業に従事する人口の割合は、66% (1910年) から57.3% (1920年) へと低下した。ハリソン前掲書、123~124頁。なお、戦争開始の直接的影響は、カタルーニャ工業にとって良好とは言えなかった。というのも開戦当初の数ヶ月間、カタルーニャの製造工場は原料の入手がほぼ不可能に近くなったため、麻痺状態に陥ったからである。

33) 例えば、バルセローナの工業労働者に関しては、1905年は14万4788人だったのが、第一次大戦を経て、1920年には19万2276人にまで増加している。また、バルセローナの人口に関して述べると、60万7170人 (1914年) から71万335人 (1920年) に増加した。Jaume Sobrequés i Callicó (dir.), *Història de Barcelona, El segle XX, I. De les anexiones a la fi de la guerra civil*, vol. 7, Barcelona: Enciclopèdia Catalana, 1995, pp. 110~112; Smith, "From Subordination to Contestation. The Rise of Labour Movement in Barcelona, 1898-1918" in Smith (ed.), *Red Barcelona: Social Protest and Labour Mobilization in the Twentieth Century*, London: Routledge, 2002, p. 18.

34) 1913年の毛布の輸出は10トンだったが、1916年には6,300トンにもなった。ハリソン前掲書、126頁。

タルーニャは一連の激しいストライキに見舞われた。ストライキの頻度の多さと激しさは、戦後のインフレーションが及ぼした影響と、組織化された労働組合の急速な成長によるものだった。カタルーニャの資本家層は、労働者の要求に断固たる姿勢で臨んだ。その理由は、経済不況によるものだった³⁵⁾。

20 世紀初頭から成長した労働運動は、カタルーニャの資本家層に大きな脅威を与えていた。彼らは、アナキズムに影響を受けた労働運動は、スペイン南部（特にアンダルシア）の「危険な労働者階級」によって、カタルーニャの「外」から持ち込まれたものだとしなした。さらに資本家層は、南部から来た移民労働者の「自由奔放な文化」は、カタルーニャ資本主義を混乱に陥れるものだとし危険視した³⁶⁾。

カタルーニャの資本家層は、組織化された労働運動への対抗策を考えなければならなかった。その対抗策の一つが、スペイン雇用主連合 Confederación Patronal Española（以下「雇用主連合」と記す）の再組織だった。雇用主連合は、公式には 1914 年 9 月にマドリードで設立され、主に建設業の強硬派の資本家に率いられた。雇用主連合で最も強大な支部になったのは、カタルーニャ雇用主連合 Federación Patronal de Cataluña だった。雇用主連合は商工会議所や先述の FTN とは異なり、労働組合に直接攻撃をかける組織だった。また、法と秩序を破壊する敵に屈して方針に従わない「弱い雇用主」に圧力をかけ、暴力や不当なストライキに対抗した。

一方 FTN は、雇用主連合の対決的な戦略と比較すると、穏健的な姿勢を取っていた。FTN はその規則で、階級闘争に直接加担はできないこと

35) 例えば 1921 年 4 月までに、カタルーニャでは 140 の綿工場が輸出市場喪失のため閉鎖され、その結果 2 万人もの労働者が仕事を失った。それ以外の綿工場は操業度を半分に落とし、5 万人以上の労働者に影響を与えていた。同書、138 頁。

36) Ealham, *op. cit.*, pp. 14-16.

になっていた。FTN はその代わりに、政治エリートを動かすことやカタルーニャ工業製品の保護など、主に営利的な目標達成に集中していた。

雇用主連合と FTN はその役割は異なったが、互いに協力し合っていた³⁷⁾。両者は、「ボリシェヴィキ」を想起させる CNT への恐怖を共有しており、それを払拭するため、「強制的な労働組合への組織化 *sindicación forzosa*」を目指した。これは、労働者と資本家の組合が結びつき、国家が保証人となる労働裁判所に統合される、というものだった。カタルーニャの資本家層はこの方法で階級闘争を克服し、CNT が労働側の代表になることを防ごうとしたのだった。ラ・カナディエンセのストライキ以降、カタルーニャの資本家は、「階級調和」を可能にする、コーポラティズムの目標達成を目指すことになった³⁸⁾。

4. カタルーニャの CNT の急成長

1864 年にロンドンで結成された第一インターナショナル（国際労働者協会）は、資本主義の私有財産制を批判し、各国の労働者階級に大きな影響を与えていた。1868 年に、バクーニン派のジュゼッペ・ファネッリ Giuseppe Fanelli（1827～1877）がスペインにアナキズムの思想をもたら

37) 雇用主連合と FTN の関係性については、以下の論考を参照。Romero Salvadó, “Si Vis Pacem Para Bellum: The Catalan Employer’s Dirty War, 1919–23” in Romero Salvadó and Smith (eds.) *op. cit.*, pp. 175–201; Smith, “The Catalan Counter-revolutionary Coalition and the Primo de Rivera Coup, 1917–23”, *European History Quarterly*, 37/1, 2007, pp. 7–34.

38) この点に関しては、以下の論考を参照。Ángeles Barrio Alonso, “La oportunidad perdida: 1919, mito y realidad del poder sindical”, *Ayer*, 63, pp. 153–184; Soledad Bengochea, “The Barcelona Bourgeoisie, the Labour Movement and the Origins of Francoist Corporatism” in Smith (ed.), *op. cit.*, pp. 167–184.

し、1870 年には、第一インターナショナルスペイン地方連合 Federación Regional Española が設立された。

このようにして始まったスペインのアナキズム運動は、20 世紀に入るまで確固たる原則を持たない、単なる暴力行為の域を出ないものだった。運動は組織化されておらず、ひとたび暴力行為を働けばそれ以上の弾圧を受け、後退を強いられてきたのである。

スペインのアナキストたちは 20 世紀に入ると、フランスの「労働総同盟 Confédération Générale du Travail」に影響を受け、アナルコサンディカリズムを採用するようになっていった。1908 年、カタルーニャの労働者組織の再編と強化を目的に、「労働者の連帯 Solidaridad Obrera」という労働組合の連合体が形成された。しかし、1909 年の「悲劇の一週間³⁹⁾」を経験したアナキストたちは、労働運動を推し進めるためには、「労働者の連帯」よりも強大な組織を結成する必要性を痛感した。そのため彼らは、「労働者の連帯」というカタルーニャ内の組織ではなく、スペイン全土の労働組合が連合した全国組織を設立しようとした。

このような経緯で 1910 年に CNT が設立された。CNT がどのような構造だったのか、簡潔ではあるがここで述べておきたい。CNT 設立当初は、アナキズムないしアナルコサンディカリズムの思想にシンパシーを抱いていない者や、社会主義者も少数ではあったが組合員となっていた。しかし、このような者たちも CNT の指導者の統制下に入った。組合に関しては、

39) Semana Trágica: 1909 年にバルセローナで起きた、モロッコのリフ族の反乱を鎮圧するため、主にカタルーニャの労働者階級の予備役の招集に反対して起きたゼネラル・ストライキと民衆の暴動、それに続く弾圧のこと。この事件で政府当局は、アナキストのフランシスコ・フェレール Francisco Ferrer を不当に処刑した。その後に起きた国際的な抗議キャンペーンの影響で、当時の保守党政権は崩壊に追い込まれた。これは体制への断固とした攻撃ではなく、大衆の反教権・反軍隊という感情の自然発生的な爆発と見るべきである。

一つの職場、あるいはある市町村において、同じ職種の労働者が職能別組合を形成する。職能別組合は地方連合 *Confederación Local*（およそ、当時のスペインの行政区域で言えば「県」に相当）に、地方連合は地域連合 *Confederación Regional*（「州」に相当）に、そして地域連合は全国連合（CNT）に結びついていた。

CNT が設立されると、カタルーニャを中心にスペイン各地で労働運動が活発になっていった。第一次大戦期、カタルーニャの労働運動の指導者の世代交代が行われた。新世代は第一インターナショナルの労働組合主義と集産主義から距離をとった。まずは、この世代交代が行われるまで、カタルーニャの労働運動がどのような者たちに率いられてきたのか説明する必要がある⁴⁰⁾。

1880～1900 年代半ばまでの指導者（第一世代）は、主に教師と印刷工だった。これらは必然的に文化的・知的活動を伴う職業であり、19 世紀後半、繊維業において現場監督が傑出した存在となったカタルーニャの社会主義運動とは対照的だった。

1900 年代半ば～第一次大戦前までの指導者（第二世代）には、教師と印刷工のほかに、主に冶金業と建設業に従事する指導者が増えた。とはいえ、教師や印刷工の指導者の数が減少したわけではなかった。繊維業（当時は社会主義者が支配的だった）に従事するアナキストの指導者は、まだほとんど存在しなかった。第二世代には「宣伝活動家 *propagandista*」と呼ばれた者たちがいた。宣伝活動家は、アナキズムに基づいた労働運動の理論を形成し、人々にアナキズムの理論を伝承して、彼らを運動に引き入れる役割を担っていた。

第一次大戦期に、再び指導部が刷新された。この世代（第三世代）は、

40) 指導者の世代交代に関しては以下の論考を参照。Gabriel, *op. cit.*, “Propagandistas confederales”, pp. 109–111.

1930年代までCNTの指導部を支配することになる。印刷工の指導者が減り、より広範な職種に従事する者たちが指導部に加わった。また、宣伝活動家の人数も増えた。この世代に特徴的だったのは、職を捨て、CNTの活動のみで生計を立てる者たちが現れたことだった。彼らは誰が見ても「CNTの人員」だと分かる身なりだった。

第一次大戦以降、第三世代が運動の中心になっていったのは、フランスの労働総同盟の革命的サンディカリズムを吸収したことが全てではない。1918年以前、アナキズムの書物はカタルーニャに多くあったが、革命的サンディカリズムに関する書物は、あまり存在しなかった。実際にカタルーニャの指導者たちは、革命的サンディカリズムに懐疑的だった。というのも、スペインのアナキズムは未だにバクーニンの影響（暴力と暴動の伝統）が色濃く、労働組合というものは、労働者の革命の精神を抑制するものとして、労働総同盟の戦術を批判していたのだ。

しかし、当時のカタルーニャの労働運動の文化は、革命的サンディカリズムと重なる部分もあった。労働組合は他のいかなる助けもなしに、労働者に利益をもたらすことが可能なものである、と見なす者もいた。また、協同組合や相互扶助組織も、労働運動の安定と継続を保証するものとみなされ、労働組合と結びついた。さらに、労働組合は単に労働者を守るものではなく、資本主義の打倒を目指す革命を支える戦術の中心だと捉えられるようになった⁴¹⁾。

CNT設立後も、カタルーニャの労働運動はCNTよりも、従来から存在した伝統的な「職能連合 *federaciones de oficio*」（職能別組合の連合体）が重要な存在だった。CNTがまだ脆弱だった時期、カタルーニャの労働運動が成長できたのは、「職能連合」のはたらきによるものであった。職能連合が、労働者組織の継続性を保証し、組合の要求を明確に述べる役割

41) Id., "Red Barcelona in the Europe of War and Revolution, 1914-30" in Smith (ed.), *op. cit.*, p. 47.

を果たしていたのだ。職能連合は、イデオロギーや思想よりも上に労働組合の主張を位置づけ、政治的な姿勢ではなく、労働者の要求そのものに基づいた労働組合の存続を主張した。そのため職能連合は、アナキストの活動家と距離を取っていた⁴²⁾。

第一次大戦後、CNT がカタルーニャの労働運動において優位に立ったことは、王政復古体制が直面した数々の危機、第一次大戦がもたらした経済危機、移民労働者の殺到、技術革新による労働過程の変遷など、様々な観点から考察されなければならないだろう。ここで指摘したいのは、カタルーニャの職能連合は未だに細かく分散しており、時代の変遷とともに、労働条件の改善を引き出すことが困難になっていった、ということである。そのため、CNT が主張した水平的な統合（その地区において産業別組合を形成する）という組織論が支持を集めるようになったのだ。

ところで、CNT はイデオロギーの面では決して統一された組織ではなかった。というのも、CNT には以下の者たちが混在していたからである。アナキズムの遺産を守ることを切望し、教義的にも理論的にもアナキストだった者；カタルーニャの広範な知識人と繋がろうとしていた宣伝活動家やジャーナリスト；CNT と職能連合の架け橋になろうとした者；暴力の行使を恐れなかった活動家、革命家、知識人（ボヘミアン）である。

（職能連合との対比で）CNT の指導者、すなわち「宣伝活動家」と呼ばれた者たちは、主に CNT の主要な機関紙⁴³⁾の編集員だった。彼らには、労働組合との繋がりや、組合運動の実際の経験がほとんどなかった。CNT の重要ポストの大半は、宣伝活動家に占められた。彼らはサンディ

42) CNT と職能連合の関係については、以下の論考を参照。*Ibid.*, pp. 49-51.; Id., "Propagandistas confederales", pp. 113-116. なお、カタルーニャにおいて職能連合の力が特に強かった部門は、繊維、建設、木工、冶金だった。

43) 例えば、『労働者の連帯 *Solidaridad Obrera*』や『土地と自由 *Tierra y Libertad*』など。

カリストというより、アナキストだった。

「宣伝活動家」と職能連合の指導者たち、すなわち「組合幹部 *cuadro sindical*」と呼ばれた者たちの間には溝があった。「組合幹部」は特定の組合と密接な関係があり、組合運動の経験が豊富だった。「組合幹部」は「宣伝活動家」より知名度は低かったが、実際の組合運動を動かしていたのは彼らだった。

「宣伝活動家」と「組合幹部」の架け橋になったのは、サルバドル・セギ⁴⁴⁾ (1886～1923) の一派だった。この一派は、フランスの革命的サンディカリズムに影響を受けた「アナルコサンディカリスト」として、アナキズムの達成を運動の最終目標にしていた。セギの一派は、労働者階級による社会革命を切望したが、労働者を冒険主義からは遠ざけ、反動的な右翼に対抗する広範な戦線を築くため、労働者階級の統一 (UGT との協同) を目指した⁴⁵⁾。

セギの一派のはたらきもあり、CNT は 1916 年、一時的に UGT と協定を結ぶことに成功した。しかし、先述の「1917 年の危機」を経て、CNT は社会主義者との関係を取り消し、再び非政治主義の姿勢を強めていくことになった。この失敗を受け、カタルーニャの労働者組織をさらに強固にすべきである、という意見がセギの一派から出された。

1918 年 6～7 月、バルセローナのサンスで CNT のカタルーニャ地域大会が開かれた。この大会には、カタルーニャの 158 の組合と約 7 万 5000

44) Salvador Seguí: 1910 年代後半から 1920 年代初頭にかけて、カタルーニャの CNT で頭角を現した指導者の一人。アナキズムを自身のイデオロギーの背景に持ち、運動の最終目標にしていたが、アナキズムの冒険主義からは距離を置いた、穏健なアナルコサンディカリストだった。

45) 労働者階級の統一に関しては、以下の論考を参照。Ealham, “An Impossible Unity: Revolution, Reform and Counter-Revolution and the Spanish Left, 1917–23” in Romero Salvadó and Smith (eds.), *op. cit.*, pp. 92–120.

人を代表する 153 人の代表者が出席した。ロシア革命についての議論もあったが、議題の中心は組合の組織化の問題で、特に「産業別単一労働組合 Sindicato Único del Ramo」（以下「単一組合」と記す）に関することだった。セギの一派は、従来の「職能別組合」を基礎にした構造を、漸進的に「単一組合」に変えていくことを目指していた。

単一組合に関して、教義がアナキスト寄りの者たちからは、「組合の自主性」に関して、反対の声が上がった。職能連合の「組合幹部」も、それぞれの組合を産業ごとにまとめる必要があるのか、疑問を呈した。しかし、セギの一派のはたらきで、単一組合を CNT の土台とすること、そして十分に発達した部門で単一組合の普及を推進していくことが決定された⁴⁶⁾。

CNT 活動家のセサル・ロレンソ César Lorenzo は、単一組合の利点を以下のように回想している。例えば、ある職種の労働者の要求が、他の職種の労働者によっても支援されるので、職種間の連帯が強まり、運動が勢いづくので、労働側の要求が以前に比べて通りやすくなったのだ。さらに、単一組合内の連帯が高まることで、熟練工と未熟練工の不和が解消されていったのである⁴⁷⁾。

また、地区・地方連合に帰する組合の自治に関して、サンス大会は「地

46) 同時に、CNT 大会に出席できる代表团に関する問題も持ち上がった。サンス大会は、CNT の代表者は何らかの組合に加入していれば、どの組合の代表者にもなれる、という決定をしようとした。これは特定の組合との繋がりがほとんどなかった「宣伝活動家」の抵抗だった。しかし、この提起はセギの一派を中心に、多くの者から反対を受けた。セギは、全ての代表者は自分が加入している組合と地区連合のみを代表できる、という提案をした。最終的にサンス大会は、ある場所の委員会・連合に関わる代表者は、その職種・土地に属する者とし、もし大会が「地域」単位のものであれば、その「地域」もしくは大会が開催される土地の代表者を任命できる、という決定を下した。これは「宣伝活動家」と「組合幹部」の妥協点でもあった。Gabriel, *op. cit.*, "Propagandistas confederales", pp.

域」連合を最も重要な地位に定めた。この決定によって地区・地方連合は、基本的には地域連合が定めた方針に従うことになった。ただしこの決定は、一般的に言われる「垂直的な連合」ではなく、あくまで地区に基づいた中央組合の組み立てを意図していたのだ。

さらに、CNT に加入している組合は、労働争議において直接行動を行使する義務を負う、という決定がなされた。CNT はアナルコサンディカリズムの革命路線を強化し、革命を志向していない組合員にも、革命の精神を植え付ける努力をすることで一致した⁴⁸⁾。

このサンス大会を機に、カタルーニャの CNT は先例がないほど急速に、そして大幅に組合員数を伸ばした⁴⁹⁾。1919 年になると、CNT は非常に強い立場になっていた。CNT はカタルーニャにおいて、一部のホワイトカラーや自由職業人も取り込んでいた。特にバルセローナにおける組織化の状況が、それを強いたのだった。よって、後述するラ・カナディエンセのストライキの発端が「事務員」だったことも、単なる偶然ではない。

47) César M. Lorenzo, *Los anarquistas españoles y el poder (1868-1969)*, París: Ruedo ibérico, 1972. [セサル・M・ロレンソ (今村五月訳) 『スペイン革命におけるアナキストと権力』 JCA 出版、1982 年、52～53 頁。]

48) CNT がアナルコサンディカリズムの革命路線を強化した点については、以下の回想録を参照。Manuel Buenacasa, *El movimiento obrero español (1886-1926)*, Madrid: Ediciones Júcar, 1966, pp. 164-165.

49) CNT の組合員数の急増について、以下のデータが存在する。1918 年のサンス大会において、カタルーニャ連合は 7 万 5151 人の組合員を代表していたが、翌 1919 年 12 月にマドリードで開催された全国大会においては、42 万 6844 人を代表するまでに成長した。特に、バルセローナにおける組合員数の増加が顕著で、6 万 7000 人 (1918 年) から 37 万 9062 人 (1919 年) になった。Antonio Bar, *La CNT en los años rojos: Del sindicalismo revolucionario al anarcosindicalismo (1910-1926)*, Madrid: Akal editor, 1981, pp. 763-770.

5. ラ・カナディエンセのストライキ

ここでは、1919 年 2 月 5 日、ラ・カナディエンセ⁵⁰⁾の事務員のストライキに端を発し、同年 4 月中旬まで続いた一連のストライキを、時間軸に沿って再構成する⁵¹⁾。

1919 年 1 月の終わり、ラ・カナディエンセに組み込まれた「エブロ川灌漑・電力株式会社 Riegos y Fuerza del Ebro S. A.」の経営陣は、8 人の事務員の賃金カットをしようとしていた。経営陣がこの措置を取ったこと

50) このストライキを再構成する前に、本論からは少し外れるが、ラ・カナディエンセという会社について触れておきたい。この会社の起源は、当時、電気工学の技師であったカルロス・モンタニェス Carlos Montañés (1919 年 3 月 13 日にバルセロナ県令に就任) らが、現在のカタルーニャ自治州の西、アラゴン自治州と接するレリダ Lérida に巨大なダム (ラ・カナディエンセの電力を生み出す水力発電所) の建設を考案したことにある。しかし、この計画を引き受けられるスペイン資本は存在せず、モンタニェスはそれをイギリスに求めた。1911 年、彼はそこで、ラ・カナディエンセの創設者となる、フレデリック・ピアソン Frederick Pearson と出会った。ピアソンは合衆国の電気工学の技師であり、当時ロンドンに移り住み、ビジネスをしていた。彼はモンタニェスの話を聞きつけて、この事業が、カタルーニャに多大な繁栄をもたらすことを理解し、これを承諾、1911 年 9 月 12 日、バルセロナ電力株式会社 Barcelona Traction, Light and Power Company Limited を設立した。なおこの会社は、ラ・カナディエンセ La Canadiense (「カナダの canadiense」という意味の形容詞) という名で一般には知られている。というのも、この会社の筆頭株主が、カナダ・トロント商業銀行 Canadian Bank of Commerce of Tronto だったためである。ラ・カナディエンセは事業を成功させるため、様々な企業を統合していった。よって、ラ・カナディエンセは様々な企業を統合したグループ会社だった。その後、1919 年の時点で、バルセロナの約 7 割の電力をまかなう会社に成長した。*La Vanguardia*, 13 de marzo de 1919; Antonio Pérez González (ed.), *La Barcelona rebelde: Guía de una ciudad silenciada*, Barcelona: Ediciones Octaedro, 2008, p. 46.

には理由があった。

当時、「エブロ川灌漑・電力」の事務員は、この会社の従業員・労働者を保護する独立系労働組合を組織しようとしていた。しかし、取締役フレーザー・ロートン Fraser Lawton はこれを決して受け入れなかった⁵²⁾。

2月4日、経営陣は独立系組合の設立に対して報復を行った。すなわち、経営陣は上記の8人の事務員の賃金をカットした。というのも、この8人の事務員こそ、独立系組合の設立を目指した中心人物だったのだ。彼らは「同じ仕事には、同じ賃金を！」⁵³⁾と主張し経営陣に抵抗したが、取締役ロートンは抗議されたことを口実に、同日、8人を解雇した。

解雇された8人のうち5人は、請求書作成部に所属していた。請求書作成部の同僚は2月5日、解雇された8人に連帯してストライキに入った。彼らは、解雇された8人全員の復職と、自分たちの雇用が保証されることを経営陣に訴え、8人が再雇用されるまで仕事に戻ることを拒否した。ストライキに入った請求書作成部の117人の従業員は、バルセロナ県令に面会した。彼らは、会社で何が起きているのか県令に説明し、争議の解決に尽力してもらえよう懇願した。県令は、もし全員が仕事に戻るのであれば、この争議の仲裁役になることを承諾した。

51) ラ・カナディエンセのストライキを再構成する際、主に、当時刊行されていた『ラ・バン Guardia アルディア *La Vanguardia*』紙（バルセロナに本社を置く全国紙。1881年創刊。イデオロギー的立場は、保守的なカタルーニャ主義で、極端な行動に走ったCNTを嫌悪する記事も見られる。）と、『エル・ソル *El Sol*』紙（再生主義の知識人が中心となり、1917年にマドリッドで創刊された新聞。このストライキの報道に関してははりばるな姿勢をとり、労働運動に賛同を示す記事も見つけることができる。）を用いた。

52) 経営陣は本社の掲示板に「適切かつ合法的なあらゆる手段を用いてこれに抵抗する」という通達を出した。*El Sol*, 23 de febrero de 1919.

53) Pérez González (ed.), *op. cit.*, p. 48.

117 人の従業員が会社に戻ると、入口にバルセローナ市警察の部隊が待ち構えていた。警察部隊は、従業員を会社内に入れさせなかった。部隊と衝突した 117 人は、経営陣に解雇された。

解雇された 117 人の従業員は CNT に助けを求めた。CNT はこの事件に介入し、先頭に立って闘うことを約束した。CNT は、なぜこの争議に関与することにしたのであろうか。第一に、公益事業という人々の生活に多大な影響を与える業種への影響力を強めたかったことが挙げられる。第二に、CNT は労働者が解雇されるのを黙視せず、資本家層に抵抗して労働者の要求を勝ち取ることができるほど、強大な組織になったことを示したかったのである⁵⁴⁾。

2 月 6 日、CNT はストライキ委員会を結成した。委員長にはシモ・ピエラ⁵⁵⁾ Simó Piera が任命され、木工業と建設業組合それぞれの代表者、「エプロ川灌漑・電力」の解雇された従業員の代表者 2 名、合計 5 名で委員会が構成された。

2 月 7 日、ストライキ委員会はラ・カナディエンセでの争議を多くの人に知ってもらうため、集会を開催する許可を県令に取りに行った。しかし、県令はこの要請を却下した。ストライキ委員会は、この紛争を多くの人に認知させ、支持を得るために、バルセローナのあるグラウンドで「サッカーの試合⁵⁶⁾」を企画した。「エプロ川灌漑・電力」の解雇された従業員全員の姿もあった。

CNT の呼びかけで、多くの人が集まった。人々は試合には興味を示さず、ラ・カナディエンセでの争議について熱心に意見を交わしていた。そ

54) Smith, *op. cit.*, *Anarchism*, pp. 292-293.

55) CNT 活動家でセギの一派。セギの側近と言える人物。

56) 当然これは「サッカーの試合」という名目で偽装された「集会」だった。*El Sol*, 8 de febrero de 1919.

のようななか、CNT の指令が伝わってきた。「ここにいる全員がストライキに入り、それを粘り強く続ける必要がある。そうすればこの闘いに勝利できる⁵⁷⁾。」この「集会」を機に、ストライキはラ・カナディエンセの他の部署や、この会社の枠を超えて様々な部門の労働者に広がっていった。

2月14日の夜、ラ・カナディエンセの集金人が3人の覆面をした者たちに襲われ、至近距離で銃撃され死亡した。この集金人には、特定の敵はいなかったようなので、ストライキ参加者に犯人の疑いがかけられた⁵⁸⁾。

2月15日、ラ・カナディエンセの電力供給部門を除き、ほぼ全ての従業員・労働者が座り込みに入った。さらに、バルセローナへ電力を供給する他の電力会社の従業員・労働者も、ストライキに打って出る構えである、と報じられた⁵⁹⁾。

労働側の断固たる姿勢に直面しても、ラ・カナディエンセの経営陣はそれに屈しなかった。その一方で経営陣は、電力供給部門の労働者がストライキに入り、電力の供給が止まることを恐れていた。さらに経営陣は、このストライキがバルセローナの人々の支持を集めており、ストライキ資金も十分に確保されていたことも考慮し、労働側と交渉することを決意した⁶⁰⁾。

2月17日、ラ・カナディエンセの本社で、経営陣とストライキ委員会の交渉が行われた。しかし、取締役ロートンがストライキ委員会の代表者にCNT活動家がいることに気づき、交渉を拒絶した。CNTはこの出来事を機に、カタルーニャ全土を巻き込んだゼネラル・ストライキに打って

57) *Ibid.*

58) *La Vanguardia*, 15 de febrero de 1919. ラ・カナディエンセのストライキは、テロ行為とは無縁のストライキであった、と説明される。しかし、似たような襲撃事件がいくつか起きている。

59) *El Sol*, 15 de febrero de 1919.

60) Pérez González (ed.), *loc. cit.*

出る準備を始めた。

2月21日午後4時、ラ・カナディエンセの電力供給部門の労働者が発電所の電源を落とし、ストライキに入った。バルセローナの約7割の電力はラ・カナディエンセからの供給だったので、この会社の電力供給を断つだけで街を麻痺させるには十分だった。

「金曜日〔21日―執筆者補足。以下同じ〕の午後4時、ラ・カナディエンセが電力を供給している全ての公益事業、工場が操業停止になった。人々は、恐れていた闘いが勃発したのだとすぐに理解した。市街電車が何台も道の真ん中に止まっており、ラ・カナディエンセの関連会社は、日没とともに業務を中断した。街の様相は通常とは異なる、恐ろしいものであった⁶¹⁾。」

「バルセローナには灯りがなくなり、無数の労働者がストライキを強いられた⁶²⁾。」

2月21日の時点で、2,000もの工場・作業場が操業停止になり、3,000人が自ら率先してストライキに打って出た。また、電力供給の停止で仕事ができなくなった者や、CNTにストライキを強いられた者は約5万人にのぼった⁶³⁾。

これほど多くの労働者をストライキに入らせるには、多額のストライキ資金が必要になったが、CNTは先述の通り、十分な資金を集めることに成功していた。CNTは資本家層が提示するいかなる妥協案も受け入れないという条件で、ストライキ参加者に資金を提供した⁶⁴⁾。

61) *La Vanguardia*, 23 de febrero de 1919.

62) *El Sol*, 23 de febrero de 1919.

63) *Ibid.*, 22 de febrero de 1919.

2月21日の夜、政府はラ・カナディエンセを差し押さえることを決定した。翌22日、工兵隊がラ・カナディエンセの本社に到着し、取締役ロートンに差し押さえを承諾させた。工兵隊は電力の復旧作業にとりかかったが、ラ・カナディエンセの技術は工兵が扱い慣れていない特殊なもので、労働者が多数の破壊工作をしていたことも相まって、復旧作業には困難を伴った⁶⁵⁾。

2月23日、バルセローナに電力を供給するもう一つの電力会社「カタルーニャ電力 Energía Eléctrica de Cataluña」の従業員・労働者がストライキに加わった。26日、バルセローナの水道・ガス会社の従業員・労働者もストライキに打って出た。ストライキは、ほぼバルセローナの全産業に達し、カタルーニャの他の都市でも、様々な業種の労働者がストライキに入っていた。

2月下旬から、様々な報道機関がストライキ参加者を非難する記事を掲載し始めていた。CNTの植字工組合はこれに対抗して、検閲を行った（「赤い検閲 *censura roja*」と呼ばれた）。この検閲によって、資本家層や軍隊による脅迫的な声明も、ストライキ参加者の目に触れることはなくなった。

バルセローナは騒然としていた。最も深刻だったのは、必需品が不足したことだった。というのも、運輸業者やパン職人がストライキに入っており、バルセローナの市場に店を構える生産者は、CNTの脅迫で商売ができなかった。この状況につけ込んだ小売店店主や市場の露天商は、法外な値段で必需品を売った。そのため、バルセローナでは騒動が頻繁に起きた。これらの騒動には、CNTの統制から外れ、暴徒と化した民衆の姿があった⁶⁶⁾。

64) *Ibid.*

65) *La Vanguardia*, 23 de febrero de 1919.

3月5日、バルセローナ軍管区司令官ミランス・デル・ボッシュ Milans del Bosch (1854~1936) は、電力部門の21~38歳の全ての男子を軍隊に動員する命令を出した。CNT活動家は、この対処を議論した。3月7日、CNTはこの命令に応じることを決定した。しかし、3,000人ものストライキ参加者が軟禁されており、その事実を知った労働者は、軍隊の命令に従わなかった⁶⁷⁾。

3月13日、ロマノーネス伯爵 Conde de Romanones (1863~1950) の自由党政権は、ラ・カナディエンセの取締役ロートンに、ストライキ委員会と交渉の席を設けるよう説得させるため、内閣府次官と新県令をバルセローナに派遣した。

3月14日、この二人とロートンが会談を開いた。労働側に強硬な姿勢をとっていたロートンは、この会談でストライキ委員会と交渉することを了承した。

3月15日、ストライキ委員会と経営陣の交渉が再び始まった。仲介役には内閣府次官、バルセローナ警察署長、県令が選ばれた。

3月17日、会社側と労働側は合意に至った。ストライキ委員会と経営陣との間に結ばれた協定は以下の通りである⁶⁸⁾。

1. エブロ川灌漑・電力〔以下「ラ・カナディエンセ」と記す〕は、

66) *El Sol*, 23 de febrero de 1919; *La Vanguardia*, 6 de marzo de 1919. なお、このような騒動は、以下の研究が指摘する通り、女性が先頭に立っていることが多かった。Temma Kaplan, *Red City, Blue Period: Social Movements in Picasso's Barcelona*, Berkeley: University of California Press, 1992; Cristina Borderías, "Women Workers in the Barcelona Labour Market, 1856-1936", in Smith (ed.), *op. cit.*, pp. 142-166.

67) Smith, *op. cit.*, *Anarchism*, p. 293.

68) *El Sol*, 20 de marzo de 1919; *La Vanguardia*, 20 de marzo de 1919.

この会社および関連会社の全ての従業員・労働者の復職を認める。

2. ラ・カナディエンセの経営陣には、この会社の全ての部署、および関連会社の全ての業務を統括する以前と同様の権限があり、従業員・労働者が職業上の技能を損なうことがないよう、彼らを適切な部署に配属する。
3. ラ・カナディエンセは以下の基準に従い、従業員・労働者の賃金を引き上げる。なお、この賃金の引き上げは17歳未満の従業員・労働者には適用されない。
 - 月給が100ペセタ以下の場合、それを60%引き上げる
 - 月給が101～150ペセタの場合は、30%引き上げる
 - 151～200ペセタは20%
 - [中略]
 - 401～500ペセタは10%
4. ラ・カナディエンセに勤務する者は、事務員、作業員および技術スタッフを問わず、バルセロナ雇用主連合が各職種の上記の部類に、最低額として支払っているものと同額の賃金を受け取るものとする。
5. ラ・カナディエンセは、この会社の事務員に2月前半の賃金を支払う。また3月1日からは、この協定で定められた賃金体系が適用されるものとする。ただし、ストライキの間の仕事の遅れを取り戻すため、本年は15日分の休暇を取り消す。なお、2月後半の賃金は、仕事が再開されてから24時間以内に支払われることとする。
6. ラ・カナディエンセの全ての従業員・労働者は1日8時間労働を享受する⁽⁶⁹⁾。

7. ラ・カナディエンセは、従業員・労働者が労災にあった場合も、賃金を全額支払うものとする。
8. ラ・カナディエンセは、ストライキに参加したことを理由に、従業員・労働者に報復を加えないことを約束する。
9. 本協定が結ばれた翌日から 48 時間以内に仕事が再開されることとする。なお、軍隊の指揮下に置かれた者に関しては、動員が解除されてから 48 時間以内に仕事に復帰すること。

以上の項目に従い、ラ・カナディエンセと従業員・労働者の代表はこの協定に署名する。

バルセローナ、1919 年 3 月 17 日

エブロ川灌漑・電力、従業員・労働者を代表するストライキ委員会

3 月 18 日、CNT はボスケ劇場 Teatro del Bosque で集会を開いた⁷⁰⁾。この集会は、前日に結ばれた協定をストライキ参加者に説明するために開催された。集会には 1,000 人以上の聴衆が集まった。

ストライキ委員長ピエラは、規律があり統制のとれた運動を展開することができたため、勝利が得られことを強調した。その上で協定の内容を読み上げ、これに同意するかどうか、聴衆に問いかけた。「もちろんだ!」「いや、同意できない!」という二種類の声が上がった。同意できないと主張した者たちは「囚人たちはどうなったのだ?」「仕事に戻る前に、まずは囚人たちの釈放を!」と切り出した。ピエラは「諸君が仕事に戻れば、すぐに囚人は釈放されるであろう」「当局は誠意をもって行動するはずである。戒厳令は[一時的に]解除されているのだ」と説明した。聴衆はピ

69) なお、1 日 8 時間労働は同年 4 月に法制化され、後にスペインの全産業に適用された。

70) ボスケ劇場の集会の様子は、*El Sol*, 19 de marzo de 1919; *La Vanguardia*, 19 de marzo de 1919 を参照。

エラとストライキ委員会に大きな拍手を送ったが、まだ納得できない者もいた。

「囚人が全員釈放されなければ仕事には戻らない。」このように主張した労働者を説得するため、CNT は 3 月 19 日、ラス・アレーナス Las Arenas という闘牛場で再び集会を開いた。そこには 1 万 4000 人もの聴衆が集まった。釈放されたばかりのセギも駆けつけた⁷¹⁾。

まず、CNT の機関紙『土地と自由』の編集長フランシスコ・ミランダ Francisco Miranda (1869～1950) が演説した。彼は、労働者が連帯して闘ったおかげで勝利を得ることができたことを強調し、聴衆を讃えた。未だに拘留されている者がいることに関して、もし彼らが釈放されなければ、CNT は再びストライキに打って出ることを保証した。そして、協定に従って明日から全員仕事に戻る必要があることを訴えた。

ミランダの演説に対して聴衆は「だめだ!」と声を上げた。「囚人の釈放は、今すぐに行われるべきだ!」「まだ闘いは終わっていない!」

そこでセギが立ち上がり、以下のことを主張した。「当然、まだ拘留されている者は、一刻も早く釈放されなければならない。当局は約束を守るはずなので、誠実かつ思慮分別のある行動をとろう。」セギは急進化する聴衆を前に、演説を続けた。

「我々にとって完全に満足のいく結果にはなっていないが、囚人がすぐに釈放される可能性があることを信じよう。労働者組織の誠実さが疑われるような、感情的な行動に走ってはならない。囚人たちのためにも、皆、仕事に戻ろうではないか。もし彼らが自由の身になれば、カタルーニャ全土に、再びストライキの波が押し寄せること

71) ラス・アレーナスの集会の様子は、*El Sol*, 20 de marzo de 1919; *La Vanguardia*, 19 de marzo de

1919 を参照。

になるであろう。[中略] 我々の組織の誠実さを示し、迫り来る次の闘いを見据え、協定を遵守しようではないか。明日、全員仕事に戻ろう。」

セギがこのように主張したことには理由があった。もしストライキ参加者が囚人たちの釈放を求めて暴挙に出れば、王政復古体制を陥れ、権威主義者の手に政権が渡ってしまう、と考えたのだ。もしそれが現実となれば労働者の組織は壊滅させられてしまう、とセギは恐れていた。

セギは、以下のような主張で演説を締めくくった。現在、労働者の組織が手にしている力は強大であり、その力を損なわないためにも、思慮分別のある行動が重要であること。もし速やかに囚人たちが釈放されなければ、再びゼネラル・ストライキに打って出ること。労働組合を通して団結することによってのみ、社会を変革することが可能であること。協定に従うことを反対した者たちの声が消え、拍手喝采が上がった。

3月20日、セギの主張に従って、多くのストライキ参加者が仕事に戻った。しかし、問題が発生した職場もあった。ストライキの最中に新たな人員が雇われ、ストライキ参加者にとって代わっていたのだ。さらに、3月22日の時点で、未だに5名のCNT活動家が拘留されていた。

復職が認められない者がおり、囚人も釈放されていない。この事態を受けてCNTは今後の措置を検討した。セギの一派に反対する急進的な者たちは、再びゼネラル・ストライキに打って出ることを主張した。セギの意に反して急進派の意見が勝利し、CNTは再びゼネラル・ストライキに打って出た。

セギは、再びゼネラル・ストライキに打って出ることを望んでいなかった。というのもセギは、先日までのストライキで憔悴しきった労働者に再び犠牲を強いることは、CNTの信用を失いかねないと考えたからである。

セギは、CNT が手にした力を維持しなかったのだ。

3月24日、CNTの急進派を中心に新たなストライキ委員会が結成され、ゼネラル・ストライキが宣言された。しかし、CNTの予想をはるかに超えた激しい弾圧が待ち構えていた。軍隊と資本家層の準備は万全だった。彼らは、政府の妨害を阻み、自分たちの条件で労働運動と決着をつけようとした。ミランス・デル・ボッシュは再び戒厳令を布告した。3月25日、ソマテン⁷²⁾がバルセローナに大挙して押し寄せた。工場や市場を開かせ、公益事業が止められるのを阻止し、CNT活動家を一斉検挙した。4月中旬には、ラ・カナディエンセの一連のストライキは収束した。

カタルーニャの雇用主はこれを機に、CNTを解体するため、軍隊の息のかかった殺し屋集団⁷³⁾を雇った。また、労働運動を分裂させる意図で、「自由労働組合 Sindicato Libre」という、CNTに対抗する新たな労働組合の組織が設立された。自由労働組合は、カトリック信徒やカルリスモを信

72) Somatén: 起源は中世で、イスラム教徒の襲来に対し、村民を武装させたもの。軍隊によって組織され、バルセローナにおける準軍事組織として作動した。ソマテンの構成員は、小売店店主やホワイトカラー、中産階級までをも含み、その指揮にあたったのがカタルーニャの貴族や富裕な産業経営者だった。「権威・宗教・秩序」というスローガンを掲げ、「赤い脅威」をカタルーニャから取り除くことを目標にした。さらにソマテンは、自由主義体制それ自体にも強い反感を抱いていた。というのも、ソマテンの構成員たちにとって自由主義体制は、社会の秩序を保ち、私有財産を守るにはあまりにも脆弱なものであったからである。

73) 最も有名なのは、マヌエル・ブラボ・ポルティエリヨ Manuel Bravo Portillo の殺し屋集団だった。彼はバルセローナの前警察署長だったが、ドイツの諜報機関と関わった罪で1918年6月に逮捕された。しかし同年12月、軍隊との関係のおかげで釈放され、参謀幕僚のマヌエル・トゥルネ Manuel Tourné 将軍の後援で、カタルーニャの地下から暴漢を集めることができた。彼の集団はCNT活動家の暗殺リストを作成し、雇用者に紛れてボディーガードや囃になり、CNTと銃撃戦を繰り返した。

条とする労働者を取り込んでいった。ここから、カタルーニャではCNTと、CNTを解体しようとする者たちとの、激しい社会闘争が始まった。

ここまで、ラ・カナディエンセのストライキの背景と展開過程を詳細に再構成してきた。それでは、「一般の」労働者たちはこのストライキでどのような行動を取っていたのか、考察していこう。

ラ・カナディエンセのストライキにおいて、一般の労働者が望んでいたのは、それぞれの職場における労働条件の改善、特に賃上げと労働時間の短縮⁷⁴⁾の要求だった。CNTは先述の通り、バルセローナの公益事業を止め、人々の生活を麻痺させることで、CNTがいかに強大な組織に成長したのか示そうとしていた。他方、一般の労働者のなかには、CNTがとった行動に不満を抱いていた者もいたようである。

「昨日、木曜日の午後4時、ゼネラル・ストライキが宣言され、電源が落ち、公益事業が止まった。我々はストライキに打って出たが、このような極端な行動を強いられたことを遺憾に思っている。というのも、この街の公益事業に損害を与え、人々の生活に支障を来すことは我々の意志ではないのだ。我々はまた、この争いがここまで深刻になってしまった原因は、何の助言も聞こうとしなかった、機転の利かないラ・カナディエンセの経営陣にあることを確信している⁷⁵⁾。」

当時の労働者の生活は過酷なものであった。労働者のなかでも比較的賃金良かった熟練工の家族でさえ、その妻や子どもたちが働かなければ一

74) 当時、バルセローナにある職場の労働時間は約10時間というところが多かった。ラ・カナディエンセの労働時間も10時間だった。*La Vanguardia*, 8 de febrero de 1919, p.4.

75) *El Sol*, 23 de febrero de 1919. この発言は、ストライキ参加者へのインタビューにおいて、ある労働者がした回答である。

家が暮らしていけないほどの賃金だったのである⁷⁶⁾。さらに、労働者は劣悪な居住区で生活しており、日々の生活することに必死だった⁷⁷⁾。ラ・カナディエンセのストライキにおいても、その様子がうかがえた。2月21日、バルセローナでゼネラル・ストライキが宣言されると、運輸業従事者や沖仲仕もストライキに入ってしまったため、バルセローナには貨物がほとんど届かなくなった。また、同月26日に水道とガスの供給も止まった。そのため、バルセローナでは必需品が不足した。商人はこの機会に便乗し、法外な値段で商品を売った。しかし、このような便乗行為に対して労働者は抗議行動に出た。彼らは労働条件の改善を求める際、テロ行為に訴えることはほとんど無かった。というのも、このストライキはCNTによって統制されていたからであり、それがラ・カナディエンセのストライキの特徴であるとされている⁷⁸⁾。しかしながら、このストライキで生じた必需品の高騰に対する抗議行動において、労働者は店を襲撃し、商人に暴行を加えていたことが明らかになった⁷⁹⁾。CNTに動員された労働者のなかには、労働条件の改善を求める行動よりも、日常品をめぐる抗議運動に重きを置いていた者もいたのである。

また先述の労働者の発言からは、労働者のなかには、公益事業を止めるという極端な行動をCNTに強いられ、結果的には、自分たちの生活が苦しくなったことに憤りを感じた者もいたことがうかがえる。CNTと一般の労働者の間には、少なからず溝が生じていたのである。とはいえ、両者の間に溝が生じたにもかかわらず、労働側がこのストライキである程度の成功を収めたことは、注目に値する。

76) Smith, *op. cit.*, "From Subordination", pp. 25-26.

77) Ealham, *op. cit.*, *Class, Culture*, pp. 27-34.

78) Smith., *op. cit.*, *Anarchism*; Gabriel, *op. cit.*, "Propagandistas confederales".

79) *La Vanguardia*, 6 de marzo de 1919.

また、労働者のなかには急進的な考えをもった者もいた、ということも付け加えておこう。CNT 活動家は、公益事業が止まればバルセローナに戒厳令が布告されてしまうかもしれない、と恐れていたのも、ラ・カナディエンセの電力供給部門の労働者には、来るべき時まで仕事を続けさせていた。そのようななか、直ちにゼネラル・ストライキを宣言すべきである、と考えていた労働者の存在が明らかになったのである。

「バルセローナの労働者はここ数日の間に、より急進的な様相を帯びてきた。CNT 活動家は〔労働者に〕仕事をするよう勧告した。しかし、労働者はそれに同意はしなかった。というのも、極端な解決策を支持する者が大勢いたのだ⁸⁰⁾。」

また、このストライキで一番被害を受けたのは労働者であり、彼らは CNT の犠牲となった、という報道がなされた。

「〔二回の〕ゼネラル・ストライキで一番被害を受けたのは、労働者自身であることに疑いの余地はない。労働者は社会の秩序を乱す者たちによってストライキに駆り出され、賃金を失うという経済的な打撃を受けたのだ。そればかりか、労働者はバルセローナにおいて、その信用を失ってしまったのである。労働者がその信用を回復させることは難しい。というのも、バルセローナにおいて CNT は法を無視した行動をする組織、とみなされているからである。実際、このストライキで CNT は街から公益事業を奪い、検閲をすることで言論の自由も奪った。CNT は、労働者の要求、という口実で法を度外視した行動に出たのである。しかし、労働者の要求はこのような暴挙によって侵

80) *El Sol*, 23 de febrero de 1919.

害されてしまった。[中略] 労働者が幸せを望む一方、国家の破壊を企んでいる無分別で熱狂的な者たちがいる。彼らは馬鹿げた理想を追い求めるため、手段を選ばない。このような者たちが高潔な労働者の間に入り込み、彼らの良識を消し、革命的な教義で彼らの脳を毒してしまったのである⁸¹⁾。」

スペインのアナキストは、19世紀後半から、労働者にアナキズムの思想を伝播し、労働運動を推し進めてきた。アナキストはたびたび、暴力を用いた極端な行動に走り、政治エリートや資本家層がその犠牲となった⁸²⁾。ラ・カナディエンセのストライキにおいても、CNT 活動家は公益事業を止めるという極端な手段を用い、バルセローナを麻痺させた。よって、CNT がバルセローナにおいて嫌悪される対象となったのは、当然のことだったかもしれない。また、先述の報道は『ラ・バングアルディア』紙の記者によって書かれているため、カタルーニャの資本家層の意図が反映されているようにも思える。この報道からは、CNT と労働者を分断しようとする資本家層の意図がうかがえる。カタルーニャの資本家層は、非常に多くの労働者を動員し、よく統制され組織化されたストライキが、どれほど恐ろしいものか、ラ・カナディエンセのストライキで実感したのである。

81) *La Vanguardia*, 15 de abril de 1919. これは『ラ・バングアルディア』紙の記者の見解である。

82) バルセローナでの事件を挙げると、例えば 1892 年にスペイン南部のヘレスで起きた農業労働者の抗議運動で首謀者に死刑が宣告されると、これに対する報復として、アナキストはバルセローナのリセウ劇場に爆弾を仕掛けた。また、1896 年には聖体行列に爆弾攻撃を行うなど、アナキストはテロ行為を繰り返した。

6. おわりに

本稿は、第一次大戦後、カタルーニャの社会闘争が激化するきっかけとなった、ラ・カナディエンセのストライキの背景と展開過程を詳細に再構成し、その歴史的な位置づけを改めて検討した。

第一次大戦後、ヨーロッパ各地で革命的な動きが活発になったわけだが、スペインもその例外ではなかった。スペインではCNTが革命的な動きの先頭に立ち、カタルーニャを中心に組織化された労働運動を展開し、王政復古体制に脅威を与えていった。政府はジレンマに陥っていた。社会革命は防がねばならないが、それと同時に、強大になった労働者の組織を弾圧すればそれ以上の抵抗を受け、事態を悪化させてしまう懸念もあったのである。また、体制の民主化を求める声が王政復古体制派の内部からも上がっていたため、労働者の権利を守ろうとする意図も政府にはあった。そのため、ラ・カナディエンセのストライキが起こり、カタルーニャの秩序が危機的な状況に陥っても、政府は労働側に寛容な態度をとり続けたのである。

ラ・カナディエンセのストライキを詳細に再構成した結果、従来からスペイン史で捉えられている通り、組織化され統制された労働組合の力が十分に発揮された事件だったことが、改めて確認された。特にセギの一派のはたらきは注目に値するものだった。彼らは、カタルーニャの労働運動が長年抱えてきた「宣伝活動家」と「組合幹部」との対立をある程度解消しただけではなく、ストライキをしっかりと組織化し、暴挙に打って出ようとした労働者を統制したのである。しかし、ラ・カナディエンセのストライキにおいてセギの一派は最終的に、CNT内で極端な行動に打って出ようとするものを統制することはできなかった。

さらに、このストライキを再構成することで、CNT は第一次大戦後に急成長を遂げ、特にカタルーニャにおいて影響力を強めていたが、決して盤石な組織ではなく、動員した労働者との間に、少なからず溝が生じていたことも明らかになった。また本稿は、従来の研究では焦点が当てられなかった CNT に動員された一般の労働者の具体的な行動や意図に関しても、ある程度、明らかにすることができた。一般の労働者のなかには、実際に直接行動に打って出たとき、社会革命という CNT の大義に身をささげるよりも、自分たちの日々の生活の向上を優先した行動をとった者もいたのである。

そして、ラ・カナディエンセのストライキは、カタルーニャの資本家層に、社会革命に対する大きな恐怖を植え付けるきっかけとなったことが確認された。彼らは、統制が保たれ、整然と組織化された CNT の労働組合がバルセローナを麻痺させたことに仰天し、CNT を「ボリシェヴィキ」と同一視するようになった。カタルーニャの資本家層は同時に、このストライキで結果的に労働側に屈したマドリードの中央政府に腹腹していた。というのも、中央政府は CNT の攻勢から資本家層を守ることはできず、1日8時間労働に報いることもしなかったからである。そのため資本家層は、王政復古体制は革命を止めることも、社会の秩序を保つこともできない無能な存在だとみなすようになっていった。なぜ政府はトラブルメーカーに報いることばかりを考え、国の富の創出者を苦しめるのか。カタルーニャの資本家層は、政治潮流の違いに目をつぶり、共通の利益を守るため結束して CNT との闘いに挑んだ。

国内の秩序の保証人であり、祖国の救済者だと自認していた軍隊も、カタルーニャの資本家層と同じ考えに至った。軍隊はラ・カナディエンセのストライキで労働側に厳しい弾圧をしなかった政府に怒りを覚えた。軍隊は、政府が「ボリシェヴィキ」と危険な譲歩をした、とみなした。そして

彼らは、王政復古体制には祖国を守る能力が無いことも確信した。

社会革命の脅威に対し、社会の秩序を守る口実でカタルーニャの資本家層と軍隊は結びつき、政府を無視して CNT に攻撃を加えていった。最終的にはリーガも資本家層と軍隊の動きに加担した⁸³⁾。ただし、資本家層とリーガはあくまで「一時的に」軍隊と共謀したに過ぎない、ということをつけ加えておきたい。基本的にカタルーニャの資本家層とリーガの利害は一致していたわけだが、もし CNT がラ・カナディエンセのストライキを引き起こさなければ、カタルーニャ主義を否定し弾圧しようとしていた、軍隊（スペイン・ナショナリズムの代表）と結びつくことはあり得なかった。カタルーニャの資本家層もリーガも、権威主義勢力は自分たちで統制することが可能な、社会革命と戦わせる便利な道具だと捉えていたのである。

ラ・カナディエンセのストライキがきっかけとなり、カタルーニャには、CNT 対 反 CNT 連合（資本家層、軍隊、ソマテン、殺し屋集団、自由労働組合）という新たな構図が生まれた。カタルーニャの社会闘争は激化し、王政復古体制全体を巻き込む問題になっていった。1922 年 3 月、バルセローナ軍管区司令官に就任したプリモ・デ・リベラはこの状況を鑑みて、もはや自由主義体制では、社会革命の脅威を粉碎することは不可能であるという結論に至った。1923 年 9 月 13 日、プリモ・デ・リベラは軍事クーデターを起こし、スペインの自由主義体制を終焉させた。プリモ・デ・リベラの周りには、スペインの自由主義体制の転覆を、1919 年からずっと唱え続けてきた、カタルーニャの資本家層が結集していた。

83) リーガが主要な役割を果たした「1917 年の危機」や、第一次大戦後にカタルーニャ自治権を求めた運動は、労働運動の手本になった、という見解がラ・カナディエンセのストライキの最中、カタルーニャの資本家層の間で広まった。資本家層の支持を失うことを恐れたリーガは、地域主義的な利害を一旦脇に追いやり、階級的な利害を優先したのだ。

文献目録

[史料]

El Sol (6 de febrero de 1919–15 de abril de 1919.)

La Vanguardia (6 de febrero de 1919–15 de abril de 1919.)

Buenacasa, Manuel, *El movimiento obrero español (1886–1926). Historia y crítica*, Madrid: Ediciones Júcar, 1966.

Cambó, Francesc, *Memòries, 1876–1936*, Barcelona: Editorial Alpha, 1981.

Lorenzo, César M., *Los anarquistas españoles y el poder (1868–1969)*, París: Ruedo ibérico, 1972. [ロレンソ, セサル・M (今村五月訳)『スペイン革命におけるアナキストと権力』JCA 出版、1983 年。]

[参考文献]

Aróstegui Sánchez, J. y otros, *Crisol. Historia. Bachillerato. Segundo Curso*, Barcelona: Editorial Vicens-Vives, 2008. [アロステギ・サンチェス, J. ほか (立石博高監訳)『スペインの歴史—スペイン高校歴史教科書』明石書店、2014 年。]

Balfour, Sebastian, “The Making of an Interventionist Army, 1898–1923” in Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism: From Revolution to Dictatorship, 1913–23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 255–274.

Bar, Antonio, *La CNT en los años rojos: Del sindicalismo revolucionario al anarcosindicalismo (1910–1926)*, Madrid: Akal editor, 1981.

Barrio Alonso, Ángeles, “La oportunidad perdida: 1919, mito y realidad del poder sindical”, *Ayer*, 63, 2006, pp. 153–184.

Bengochea, Soledad, “The Barcelona Bourgeoisie, the Labour Movement and the Origins of Francoist Corporatism” in Angel Smith (ed.), *Red Barcelona: Social Protest and Labour Mobilization in the Twentieth Century*, London: Routledge, 2002, pp. 167–184.

Borderías, Cristina, “Women Workers in the Barcelona Labour Market, 1856–1936” in Angel Smith (ed.), *Red Barcelona: Social Protest and Labour Mobilization in the Twentieth Century*, London: Routledge, 2002, pp. 142–166.

Ealham, Chris, *Class, Culture and Conflict in Barcelona (1898–1937)*, London: Routledge, 2005.

—“An Impossible Unity: Revolution, Reform and Counter-Revolution and the Spanish Left, 1917–23” in Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism: From Revolution to Dictatorship, 1913–23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 92–120.

Gabriel, Pere, “Propagandistas confederales entre el sindicato y el anarquismo. La construcción

- barcelonesa de la CNT en Cataluña, Aragón, País Valenciano y Baleares", *Ayer*, 42, 2002, pp. 105-145.
- "Red Barcelona in the Europe of War and Revolution, 1914-30" in Angel Smith (ed.), *Red Barcelona: Social Protest and Labour Mobilization in the Twentieth Century*, London: Routledge, 2002, pp. 44-87.
- Harrison, Joseph, *An Economic History of Modern Spain*, Manchester: Manchester University Press, 1978. [ハリソン, ジョセフ (弘田嘉男訳) 『スペイン経済の歴史—18世紀から現代まで』 西田書店、1985年。]
- Kaplan, Temma, *Red City, Blue Period: Social Movements in Picasso's Barcelona*, Berkeley: University of California Press, 1992.
- La Porte, Pablo, "The Moroccan Quagmire and the Crisis of Spain's Liberal System, 1917-23" in Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism: From Revolution to Dictatorship, 1913-23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 230-254.
- Moreno Luzón, Javier, "The Government, Parties and the King, 1913-23" in Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism: From Revolution to Dictatorship, 1913-23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 32-61.
- Pabón, Jesús, *Cambó, 1876-1918*, Barcelona: Editorial Alpha, 1952.
- Pérez González, Antonio (ed.), *La Barcelona rebelde: Guía de una ciudad silenciada*, Barcelona: Ediciones Octaedro, 2008.
- Quiroga, Alejandro, "Nation and Reaction: Spanish Conservative Nationalism and the Restoration Crisis" in Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism: From Revolution to Dictatorship, 1913-23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 202-229.
- Romero Salvadó, Francisco J., "Si Vis Pacem Para Bellum: The Catalan Employers' Dirty War, 1919-23" in Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism: From Revolution to Dictatorship, 1913-23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 175-201.
- , *Spain 1914-1918: Between War and Revolution*, London: Routledge, 1999.
- Romero Salvadó, Francisco J. and Angel Smith, "The Agony of Spanish Liberalism and the Origins of Dictatorship: A European Framework", in Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism: From Revolution to Dictatorship, 1913-23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 1-31.
- Seidman, Michael, *Workers against Work: Labor in Paris and Barcelona during the Popular Fronts*, Berkeley: University of California Press, 1991. [サイドマン, マイケル (向井喜典・岩村等ほか

- 訳)『労働に反抗する労働者—人民戦線期のバリとバルセロナにおける労働』大阪経済法科大学出版部、1998年。]
- Sobrequès i Callicó, Jaume (dir.), *Història de Barcelona, El segle XX, I. De les annexions a la fi de la guerra civil*, vol. 7, Barcelona: Enciclopèdia catalana, 1995.
- Smith, Angel, *Anarchism, Revolution and Reaction: Catalan Labour and the Crisis of the Spanish State (1898–1923)*, New York: Berghahn Books, 2007.
- “The Lliga Regionalista, the Catalan Right and the Making of the Primo de Rivera Dictatorship, 1916–23” in Francisco J. Romero Salvadó and Angel Smith (eds.), *The Agony of Spanish Liberalism: From Revolution to Dictatorship, 1913–23*, Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2010, pp. 145–174.
- “The Catalan Counter-revolutionary Coalition and the Primo de Rivera Coup, 1917–23”, *European History Quarterly*, 37/1, 2007, pp. 7–34.
- “From Subordination to Contestation: The Rise of Labour in Barcelona, 1898–1918” in Angel Smith (ed.), *Red Barcelona: Social Protest and Labour Mobilization in the Twentieth Century*, London: Routledge, 2002, pp. 17–43.
- , “Barcelona Through the European Mirror: From Red and Black to Claret and Blue” in Angel Smith (ed.), *Red Barcelona: Social Protest and Labour Mobilization in the Twentieth Century*, London: Routledge, 2002, pp. 1–16.
- Tavera, Susanna, “La historia del anarquismo español: una encrucijada interpretativa nueva”, *Ayer*, 42, 2002, pp. 13–37.
- Woodcock, George, *Anarchism: A History of Libertarian Ideas and Movements*, Cleveland: The World Publishing Company, 1962. [ウッドコック, ジョージ (白井厚訳)『アナキズム』(I・II) 紀伊國屋書店、1968年。]
- 石井陽一・戸門一衛『スペイン—その国土と市場』科学新聞社出版局、1990年。
- 関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系 スペイン史 2—近現代・地域からの視座』山川出版社、2008年。
- 立石博高「カタルーニャ・ナショナリズムの歴史—民族精神から言語＝文化的同化論へ」立石博高・中塚次郎編『スペインにおける国家と地域—ナショナリズムの相克』国際書院、2002年所収、99～143頁。
- 野上和裕「スペイン立憲君主制の崩壊—カタルーニャの社会変動を中心として (1)」『国家学会雑誌』100号、1987年、569～629頁。
- 「スペイン立憲君主制の崩壊—カタルーニャの社会変動を中心として (2)」『国家学会雑誌』101号、1988年、56～124頁。